

子どもによる市民のための情報誌『WAVE桜』



『WAVE桜』は、十代の若者が自分たちの思いや考えを社会に発信しようと考え、発行した情報誌です。その活動について、以下に体験記として編集長の山本さんが書いてくれました。

『WAVE桜』編集長 山本 智之

私たちは、「子どもによる市民のための情報誌」をキャッチフレーズとして掲げ、『WAVE桜』という情報誌を作っています。『WAVE桜』は、今を生きる十代の切実な思い、考えを世に発信していくことを主たる目的として、千葉県佐倉市において2001年の8月から(制作活動は2001年6月から)発行されてきました。今までに7つの波が発信されており、朝日新聞の取材を受け、社説に掲載されたり、NHK千葉放送局のFM放送「まるごと千葉60分」に出演したりするなど、マスコミの注目を集めてきました。

始めるきっかけは、2001年の6月のことです。『WAVE桜』の呼びかけ人・初代編集長の三森くん(当時14歳)が、あるきっかけで『ウェーブいしおか』という、子どもが編集に携わるタウン誌の存在を知り、「これだ!」とばかりに周囲の友人に声をかけはじめました。そして集まった12～16歳の約10名の中高生。ここから『WAVE桜』は始まるのです。

はじめは、ただなんとなく「会議」と称して集まって、トランプなどのゲームをしているだけでした。なにしろ、「自分の考えを紙面に載せ、発行する。」という漠然とした目標はあれども、「資金はどうでしょうか。」「印刷はどうでしょうか。」「どこにどうやって配ろうか。」などの発行をする上での具体的な問題は山積みで、どこから手をつけていいかまったくわからない状態なのです。しかしそれでも、何回か回を重ね、ゆるゆると話をしていくと、それぞれが自分のアイデアを出しあうようになり、だんだんと『WAVE桜』の構想ができあがっていくのでした。

そんな中で、とりあえず決めたことは、『WAVE桜』という誌名。『WAVE』はモデルとなった『ウェーブいしおか』のウェーブ(情報の波という意味)をそのままとって英語で表記し、『桜』は私たちが住む街・佐倉をかけ、なおかつ佐倉という地域限定にたくないというところから文字を変えてつけました。そして、その『桜』には、

「桜の木を一生にたとえると、自分たちはちょうど今が春だから。」という意味も含まれています。

資金については、カンパを募ったり、地元の祭りで許可を得て店を出店したりして、なんとか 1 号分ほどは捻出することができました。印刷は、子どもの活動を支援する市民団体、NPO 佐倉こどもステーションの支援によって行うことができました。配布は、市内の公共施設や塾・書店等に置かせてもらったり、大勢の市民が集まるような会に積極的に参加し、直接手渡ししたりしました。

第 1 号の発行作業が大方終了し、外部から、「まとまりが無くて読みづらい。」という評価を受けました。そこで第 2 号以降は、その号ごとに特集を設け、誌面全体の統一感を高めることにしました。これは、もともと号全体のテーマを設けようという案でした。しかし一冊丸ごと、テーマを指定してしまうと、「書きたいものを書きたいだけ書く」という『WAVE 桜』本来のスタイルが失われてしまうのではないかと新たな問題が浮上してきます。そこでその号ごとに 1 つのテーマに基づいた「特集」を設け、特集以外の部分ではやはり好きなことを書く、という形になったのです。第 1 号と、それ以降の号の大きな違いとなるポイントです。ちなみに、今までに取り扱われた特集のテーマは「戦争と平和」、「福祉」、「教育」、「政治」などです。

また、『WAVE 桜』では、発行作業以外にも様々なイベントに対し、参加・参画をしてきました。2002 年 9 月には、「子どもによる 子どもとともに 21 世紀の都市デザイン『今昔子ども会議』」というイベントを自ら企画し、現代の子ども・昔の子ども(現代の大人)を交えたパネルディスカッションを通じて 21 世紀の子ども像を考えたりもしました。

『WAVE 桜』の活動が社会全体にもたらした影響とは、どれほどのものでしょうか。それは言ってしまうと、露ほどもないようなものでしょう。しかし、私たち『WAVE 桜』編集員と、その周囲の人間にもたらした影響は計り知れません(いい意味で)。社会参画とは、何も社会全体に影響をもたらすようなことばかりではないでしょう。私たちや、その周囲といった小さなコミュニティであっても、それは一つの社会であり、『WAVE 桜』の活動は立派な社会参画なのです。私たちはそのことを胸を張って言えます。



今昔子ども会議 (2002 年 9 月)

分類	内容	情報誌発行		子どもによる市民のための情報誌『WAVE桜』			
	活動主体	青少年グループ					
参画の段階	7.5	その理由	「子どもたちが何のためにやるかを自分たちで決めて、自分たちで分担をして活動をする。大人がほとんど役割がなくて腕を組んでみていればいい。」基本はまさにその通りである。ただし、時として大人を巻き込んだ企画を立てることもあり、この場合は8と評価できるので、+0.5して中間の7.5とした。				
団体名	WAVE桜編集局	E-Mail	wave@inba-county.net	URL なし			
代表者名	三森 篤志			スタッフ	編集員自身がスタッフであり、参加者である。強いて言うなら、相談役の大人が一人。		
実施時期	2001年6月より開始 継続中	参加人数	10名前後	対象	市民(?)	年齢	10代
他団体・組織との連携		NPO佐倉こどもステーション		活動資金	地元の祭りでの出店、カンパ、広告料、WAVE桜の販売、賛助会員、助成金など。		
趣 旨	社会における様々な問題に対して、子どもの立場から見た率直な意見や考えを世の中に発信していく。						
実施することになったきっかけ	社会に対する不満がたまる中、三森が『ウェーブいしおか』という子どもが編集に携わるタウン誌の存在を知る。自分も世の中に意見を発信したい、と周囲に声をかけ、同調したメンバーで活動が始まった。						
事業(活動)内容	・子どもによる市民のための情報誌『WAVE桜』の発行(取材・研修を含む)。 ・子どもの社会参画の実践・推進。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	自分達で動き始め、資金を稼ぎ、取材をし、記事を書き、印刷してきた(もちろん、大人の支援がなければできなかったが)。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	WAVE桜編集局	青少年			情報の提供、編集スペースの提供		
何かあったときに、大人がサポートする。また大人は、青少年に対して、これらの活動を広げる機会を紹介したり、提供をしている。大人の目で勝手な判断をしないようにして、子どもたちを見守ることにしている。							

表の見方は P.55 参照



チャイルドライン千葉子ども電話 若者ライン

「チャイルドライン」は、18歳以下の子どもなら誰でも、いつでも、どこからでも、かけられる電話のことで、もともとイギリスの特集番組でのホットライン開設がきっかけで始まりました。そして、そのホットラインへの大きな反響では、子どものための電話の必要性が叫ばれました。

「チャイルドラインって何？」・・・ <http://childline.at.infoseek.co.jp/pc/cline2.htm>

「チャイルドライン」の受け手(子どもからの電話で子どもの気持ちを受ける人)は基本的に大人ですが、『若者ライン』は、その受け手に若者になっているところに特徴があります。若者が、自分たちと同世代の若者や子どもからかかってくる電話をとり、悩みなどを聞いています。

特定非営利活動法人子ども劇場千葉県センター理事 若者ライン担当

私は2000年5月の設立当初からのメンバーではなく、2002年の11月から参加しました。ちょうど若者ラインへのアクセスが多くなり、活動が軌道に乗りはじめた頃でした。福祉職に就くことを希望していたのでその参考になればという程度の軽い気持ちで始めました。

始めてみて、自分と同世代の若者が電話の向こう側の子どもの話を真剣に受け止め、考えぬいている姿を知るととても驚きました。子どもと話すことは楽しい事ばかりではありません。傾聴することがしんどくなる、とても苦しい話もあります。彼らはそのひとつひとつを大切に受け止め、子どもの秘密を洩らさないことを固く守っていました。電話を受ける上での悩み事は仲間うちで共有し、何度も何度も話し合いを重ねながら電話を取っていました。

一緒に活動をさせてもらううちに、私が漠然と持っていた福祉観は大きく変わりました。今までどこか「話を聞いてあげる」「私が助けてあげる」というエゴイスティックな気持ちを持っていたことに気づかされました。子どもの話に寄り添い、少しでも子どもの支えになることを目指して失敗をくりかえす過程のなかで、「～してあげる」という気持ちからは何も生まれえない、私のほうが子どもから大切な気持ちを受け取り、勉強させてもらっていると思った瞬間がありました。このような気持ちの転換ができたことは、私の財産になっています。また、子どもの話から彼らをとりまく社会状況の深刻な問題を知ることになり、それをもっときちんと知りたい、子どもが生きやすくなるような社会をつくるためにはどうすればいいか知りたいという思いが募り、進学を選びました。この活動は、私の意識を変えてくれました。

また、この事業に関わる大人との出会いが私にとって貴重でした。若者は自主的にミーティングや研修を積み重ねていますが、その活動を大人は全面的に信じて見守っています。「指導する」「説教する」ということはせず、一緒に活動する対等な仲間として常に若者を尊重してくれています。若者と大人の共同参画という言葉はよく聞かれますが、若者を信じて見守るということをお口だけではなく態度で実践している大人に私は初めて出会いました。そんな大人の態度から、私は多くのことを学びました。

この活動に集う若者は、日常生活ではなかなか出会わないような人が多くいます。高校生、大学生、専門学校生、不登校経験者、フリーター等々。年齢もさまざまです。お互いのバックグラウンドが違っても、活動を続けていくために本音で話しあい、ぶつかりあっています。この活動は私たちの居場所にもなっています。

2004年度から、私は若者の中から母体である子ども劇場の理事に選任され、若者と大人の間の情報伝達や意思疎通をさらに円滑にするための橋渡し役として活動しています。今までとは少し仕事の内容が変わり、失敗ばかりする日々ですが、信頼できる大人や仲間を支えられて頑張っています。

分類	内容	電話相談		チャイルドライン千葉子ども電話 若者ライン			
	活動主体	青少年グループ					
参画の段階	5	その理由	事業の主催者は大人であるが、若者ライン独自のミーティングでの決定を尊重し、十分な話し合いをしたうえで事業に取り入れてくれるから				
団体名	特定非営利活動法人 子ども劇場 千葉県センター	E-Mail	kidchiba@lily.ocn.ne.jp		URL なし		
代表者名	岡田泰子		043-301-7262 (団体連絡先)	スタッフ	大人8人 若者10人(うち受け手と兼任して子ども劇場理事1名、実行委員長1名、シフト係3名)		
実施時期	毎週土曜日19～21時	参加人数	大人8人 若者10人	対象	女:男 = 7:3	年齢	18～23歳 (若者のみ)
他団体・組織との連携		チャイルドライン全国支援センター、千葉県内の子育て関連機関		活動資金	自己資金、子ども電話後援会費、助成金等		
趣 旨	電話を通して子どもたちの悩みや相談事、ちょっとした日常の出来事などさまざまな話を傾聴する						
実施することになったきっかけ	千葉県内にある子ども劇場の高校生交流会で出会った有志が、すでに「子ども電話」を実施していた大人たちの活動に関心を持ち自分たちもやってみようと思った。						
事業(活動)内容	電話の受け手活動、研修、ミーティング、チャイルドライン全国集会への参加、若者の取り組みについての報告会の企画など						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	若者自身で電話を受けるシフトを組み、電話を受ける。その際必ず大人1名に支え手として来てもらい、助言を受けたり、相談に乗ってもらったりする。研修やミーティングも若者自身で企画し、大人に提案する。2004年度から母体である子ども劇場千葉県センターの理事に若者が1人選任されたことをきっかけに、大人と若者の間の意思疎通をなお一層円滑にとれるように工夫している。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	特定非営利活動法人 子ども劇場千葉県センター	青少年と大人					
何かあったときに、大人がサポートする。また大人は、これらの活動を周囲に広げていく役割がある。活動を理解してもらいようにしなければならない。大人の目で勝手な判断をしないようにして、子どもたちを見守ることにしている。							

表の見方は P.55 参照



【「WAVE 桜」と「チャイルドライン千葉子ども電話 若者ライン」についてお話を伺った方】

NPO 佐倉こどもステーション 黒木裕子さん、大場博子さん

Q 「子ども参画」の活動を進めるようになったきっかけは？

A(黒木) 40年ほど前に、テレビが大衆化され家庭で普通に見られるようになって、子どもたちがその虜になってしまったときに、生の舞台を子どもたちに提供しようというところから、「子ども劇場」運動が始まりました。一時は全国で約700劇場もありました。会員は大人と子どもですが、劇の鑑賞などの大きなイベント時に募集して増やしていきました。その活動の中で子どもキャンプが始まりました。最初は大人が主導で、子どもの実行委員会があり、それを学生が引っ張る形で実施していました。

転機となったのは、10年ほど前です。子どもキャンプを巣立っていった子どもたちに、自分の言葉で語れない人が多いことに気がつきました。その原因として考えられるのは、大人の言われるままに活動してきましたので、自分の考えや意志で行動できなくなってしまっているのではないかということです。

そこで大人が主導であったのを、大人が前面から退いて、失敗してもいいから子どもと青年(高校生から大学生)が、やりたいキャンプをするようになりました。しかし「子ども劇場」の会員の大人の中には、「子どもは失敗してもいいのか」という疑問を提示する人もいました。その人たちに理解してもらうことが大変でした。

現在は大人が見守ることが重要であることを、会員に理解してもらいながら活動しています。事務局スタッフとしては、大人に理解してもらうことに重点を置いています。

「子ども劇場」で育ってきた若者たちが、いろいろな活動を立ち上げて、実施しています。例えば「ミニ佐倉」を立ち上げた中村桃子氏は「子ども劇場」に子どもの頃から出入りしていました。

「ミニ佐倉」は商店街を舞台に子どもたちが自分たちでまちをつくり、その中で仕事をしたり、商売をしたり、遊んだりするというを実際にやってみるイベントです。「居場所づくりと社会つながり」(子どもの参画情報センター編)に詳しく掲載されています。

Q 他にはどんな若者の活動がありますか？

A(大場) 「WAVE 桜」という情報誌を若者たちが自分たちで取材し、編集・発行しています。これはある中学生が「おもしろいからやりましょよ」と仲間の中学生に声をかけて始まりました。自分たちでやりたいことを見つけ、自分たちの力で活動しています。「おもしろいからやる」という発想です。当然失敗するというリスクもあります。大人はこの活動に対して、場の提供として、自宅の一室を提供しています。また人的・資金的情報を提供しています。助成金を申請するときなどは、大人は説明責任があるので、必要があれば手続きをしています。大人としては子どもの活動を保障することを第一義に考えています。しかし自宅の一室を提供する際に、子どもたちで自然にルール作りをしています。また自分の子どもが同世代ですが、無理にこの活動に参加させるようなことはしていません。

A(黒木) 若者たちが「若者ライン」という活動をしています。「チャイルドライン」の若者版ということになります。つまり電話の受け手を若者がやっているということです。この活動のきっかけは、カナダで若者が電話の受け手をしている「ヘイライン」というものがあり、3年前にそのメンバーが来日したときに、そこへ子ども劇場に出入りしている若者が会いに行きました。そのときにおもしろいと思い、やってみようということになりました。現在高校生から大学生の13人のメンバーで、毎週土曜日に2～3人のローテーションを組み活動しています。

「子どもキャンプ」のやり方を変えて見て、子どもの変化が表情や身体に現れてきました。生き生きしていません。元々子ども劇場の子どもたちは社会への関心が薄かったです。それが「ヘイライン」に興味を示し、活動を

始めたということは、子どもが主体的に取り組んで活動をするようになった結果が現れているのではないでしょうか。

この活動をするために、メンバーたちは「傾聴ワーク」というロールプレイを取り入れたワークをやっています。3人一組で、話す役、聞き役、2人の様子を見る役に分かれて実施するものです。これをやっていく中で、お互いの考えていることが自然に出てきて、それを素直に聞けるようになり、メンバー間のコミュニケーションが深まっていきました。仲間意識が出てきました。その上に使命感を持つようになり、社会的な役割を認識できるようになってきました。

クリスマスに「クリスマスライン」というイベント的なものもやってみました。子どもたちに夢を与えるような電話にしたいということで、幼稚園にピラを配ったりしました。子どもたちの電話の中には、「サンタさんですか?」というようなものもありました。大成功でした。

しかし皆が来なくなるようなこともありました。お互いに本音を言わないで避けるような行動に出ているとわかると、皆にメールで「今やめたら中途半端ではないの?」と呼びかけ、何とか戻ってきたときもあります。

活動自体をやめることについて、皆がこの活動に一段落を付け、納得して別の活動に方向転換していくのであれば、それはある意味卒業を意味していて、かまわないと思います。

Q 若者が主体的に進めている活動で大人はどんな役割をしているのでしょうか?

A(黒木) 何かあったときに、大人がサポートします。また大人は、これらの活動を周囲に広げていく役割があります。活動を理解してもらうようにしなければなりません。

Q 大人は子ども・若者たちとどう接しているのでしょうか?

A(黒木) 彼らの適性などを決めつけないようにしています。これは学校でありがちではないでしょうか。彼らのやりたいことを最優先します。間違いを犯したときは、素直に認めることが大切です。「若者ライン」の活動をマスコミが取材に来たときに、社会に活動を理解してもらうために電話の内容を出したときがあり、若者に非難されました。こんなときに、間違いを認めることで、若者との関係修復をしていきました。

また子どもが精神的にバランスを崩しているときもあります。こんなときは大人が目で勝手な判断をしないようにして、見守ることにしています。3,4ヶ月かかることもあります。このようなことは日常的な人間関係ができていますので可能なのです。

Q 子ども・若者と関わることで、大人が変わっていくことはありませんか?

A(大場) 大人は子どもと接していて、いろいろなものをもらっていると思います。例えば「発想の柔軟性」「子育て中であれば、子どもとのスタンス(間合い)の取り方」などです。思春期にある自分の子どもとうまくいってない母親がいて、彼女が自分の子どもと同世代の子どもたちと関わるようになってから、子どもの見方、考え方が変わりました。いろいろな子どもと接することで、「自分の子どもだけが特別でなく、普通なんだ」と思えるようになり、肩の力が抜けて、子育てが楽になったということです。

また小学生の市民ミュージカルの活動(数ヶ月から1年の活動)で、母親が子どもパートナーという役割を与えられ、子どもと一緒にオリジナルのものを作って上演するものでした。そこに親子で参加している人がいて、子どもは5年生でしたが、日常的に関係がぎくしゃくしていました。その母親は活動をしていくうちに、いろいろな子どもと接し、よその子ども可愛くなり、おもしろくなってきて一生懸命になってしまいました。そんな母親を見ていて、子どもも共感できることがあり、いい関係に戻っていったということがありました。

大人と子どもは一緒に活動せず、子どもだけで自由にさせた方がいいという考え方もあります。しかし、親が

夢中になって楽しむことが大切だと思います。大人はそんな中で体験的に子ども理解をしていき、子どもに対する価値観が変化していくと思います。

活動は1回だけのものではなく、継続してできるものが子ども・若者にとっても大人にとってもいいです。

Q 子ども・若者が主体的に活動していく中で、子ども・若者にどんな変化がありましたか？

A(黒木) 「若者ライン」のメンバーの中には家庭に問題を抱えている若者がいました。仲間を求めているがうまくいってませんでした。それが「傾聴ワーク」をしていくうちに、自分の感情を出せるようになって、関係性が深まり仲間ができました。活動をしていくうちに自分が役に立っているという実感を持てるようになり、素直にうれしいと感じました。電話の相手を救うだけでなく、自分も救われました。そして社会に役立つ活動をしていきたいと考えるようになり、目標を持つようになりました。

A(大場) 情報誌「WAVE桜」を発行する活動では、若者たちは社会に目が向くようになってきています。自分の中に問題を抱えている若者で、今まで目に入ってこなかった自然や風景を見て、素直に美しいと感じられるようにもなりました。責任感も芽生え、社会に深い関心を持ち、社会とのつながりを意識するようになりました。また本音でしゃべれる仲間もでき、編集会議ではとっくみあいになりそうな雰囲気になることがありますが、それを話し合いで解決しています。あまり深入りしたくないと思っていた若者も、知らず知らずに、活動にも仲間にも深く関われるようになってきたと自分の口で言うようになりました。

子ども・若者は、積極的に外へ出す方がいいと思います。社会に出ていろいろな大人と出会ったり、知り合う中で、魅力的な人に出会うことがあります。そうすると彼らの価値観や考え方が変わり、すぐにそれを行動に表すことが、子ども・若者にはできます。人前で話すことがあまり得意でなかった若者が、話すことを怖くなくなり、NPO 法人を作り、社会のために働きたいと言っています。活動を通じて社会の中の一市民に成長していくきっかけとなっています。

Q 大人に望むことは？

A(黒木) 子どもたちと関わる活動の中で、裏切られたりして落ち込むことがあります。そんなときに少し時間をおき、冷静に考えます。そしてまわりには仲間の大人がいます。相談しあいながらまた活動を再開します。

子ども・若者の見方や考え方について、大人たちが1人ずつでも変わっていけば、子ども・若者たちとの関係もうまくいくようになります。大人たちがそんな仲間を増やし、子ども・若者が主体的に参画する活動を保障していくことで、子ども・若者が成長し社会的に自立していくきっかけにしていければと思います。



町田市子どもセンターばあん 子ども委員会



“町田市子どもセンターばあん”は、乳幼児から 18 歳までを対象とした地域の子どものための自由な遊びの拠点、子育ての拠点として 1999 年に開設されました。“ばあん”とは、Barn (納屋) = 「いろいろなものがいっぱい詰まっているところ」、Burn (燃える) = 「火がついて炎があがる、感情が高まる」、Barn (スウェーデン語で子ども)、「キミのハートにバーン」の4つに由来しています。

小学生から高校生までの青少年による子ども委員会が、施設の建設段階から話し合いを持ち、その意見を反映して、開設されました。現在は日常的な活動からイベント的な活動まで、子ども委員会で話し合わせ、実施されています。

【お話を伺った方】

町田市子どもセンターばあん館長 奥津林 蔵さん

町田市子どもセンターばあん職員 粕川 秀人さん

草野 大輔さん(子ども委員会委員長、運営委員会委員長、子どもマスタープラン子ども委員会委員長)

佐藤 一貴さん(子ども委員会前委員長、のびっこ長、ガンプラ部長)

鈴木 葵さん(子ども委員会副委員長、欲張り部部長、遠足課長)

Q 「ばあん」開設のきっかけは？

A(館長) 「まちづくりは人づくり」という当時の町田市長の考え方に基づいて、青少年施設を開設してきました。しかし急激な人口増に伴い、学校建設等に追われ児童館建設にまで予算がまわりませんでした。新住民

などによる「児童館がほしい」「学童保育施設を作ってほしい」という要望が強くなってきました。その時期に「子どもの権利条約」を日本が批准するということが重なりました。そこで「中高生の居場所」「子育て支援の場」として児童館の位置づけの施設として計画が持ち上がりました。

専門家として東京工業大学の仙田満氏を迎え、市民らを巻き込んで子どもセンター建設検討委員会を立ち上げて、市内 5 箇所に作ろうということになりました。その 1 号館が、「ばあん」という名称で 6 年前(1999 年)に開設されました。

Q 「ばあん」を開設するにあたって、子どもの声をどのように反映したのですか？

A(館長) 「ばあん」を建設するにあたって、青少年課が柔軟な対応を示し、地域住民らによる運営準備委員会を作って検討しました。その中で子どもの権利条約にある子どもの意見表明権に基づき、すでに着工していたがオープンの 1 年前に子ども委員会を作り、子どもたちの意見を吸い上げることに努力しました。

Q 子ども委員はどのように集めたのですか？

A(館長) 住民らが中心になって、小学校、中学校、高等学校にチラシをまき、小学校 4 年生から高校生の子どもたちを集めました。実際にはなかなか集まらず、教員推薦や住民の子どもが多かったですが、中には自分からチラシを見て来た子どももいて、全部で 45 ~ 46 名になり、毎月第 1,3 土曜日に委員会が開催されました。今でも継続しています。

Q 子どもの意見は反映されましたか？

A(佐藤・…ばあんの名付け親) 中学 1 年生のときに自分でチラシを見て、おもしろそうだと思って参加しました。自分としては、自分たちの決めたことが 100 % 以上反映されたと思います。

Q どんなところに反映されましたか？

A(館長) 運営方法などのソフト面だけでなく、ハード的な部分も変えていくこともありました。建設中の建物を子どもたちがヘルメットをかぶって見せてもらったり、照明関係を変えてもらったり、調理できる部屋を作ってもらったりしました。

このようなことが実現できたのは、職員を通じて届いた子どもや地域住民の声に対して、青少年課が柔軟に対応したことにあると思います。

Q 委員会の中で大人が口出しすることはなかったのですか？

A(館長) 大人たちはオブザーバー的に参加していましたので、意見は言いませんでした。したがって子どもたちは自由に意見を言うことができました。子どもたちがわからないことがあれば、大人たちは答える役割に徹していました。

子どもたちがやりたいと言い出したオープニングセレモニーの模擬店では、青少年課に予算がありませんでした。地域の大人たちの有志が 1 人 1 万円出して、60 万円を集めました。この時に出した模擬店の収益と、その後に行われるようになった春・夏・秋のお祭り子ども委員会から、出店依頼を受けて行った模擬店の収益を地域の子どものために還元したいという趣旨から、隔月で「ばあんご飯の会」を開き、館内にいる子どもたちや大人の方たちにも食べていただいて、大人と子どものコミュニケーションの場としています。タオルのおじさんという名物となっている人がいて、イベントでは必ず焼鳥屋を出しています。このような人たちが自然と集まって、「ばあんの会」ができていったのです。そして新住民と昔から住んでいる住民が理解し合い現在に至っています。

す。

Q 職員として関わってきて、苦勞した点や以前の職場と変わった点などはありますか？

A(粕川) オープン時から職員ですので 6 年目になります。以前の職場は学童保育の指導員でしたが、生活の時間帯が変わりました。ある意味、楽になった部分もあります。それは子どもたちと関わる際にあまり準備をしなくなりました。任せられるようになりました。自分たちから相談してくれますので、こちらから口出しすることはあまりありません。ただし自分で言ったことや決めたことをやらずに何も言っていない子にやらせているような場面では強く叱ります。

公務員の感覚は薄いです。子どもたちの力を重視してやってきました。それによってとんでもないことになったと思うこともあり、苦勞もしますが、何とかなるだろうと思っています。子どもたちも皆でフォローしあっています。

A(館長) 委員会の中で「欲張り部」というものが結成されて、自転車で日本海に行こうという企画が持ち上がりました。この際には、彼(粕川さん)は休みを取って友人を誘い下見に何度も行っています。また市役所へカンパを集めに行き、職員から 6 万円以上を集めました。また職員組合にも掛け合って、帰りの車を提供してもらいました。

Q 春・夏・秋にお祭りをやっていると聞きましたが、どんなお祭りですか？

A(粕川) いつもストーリーを決めて、オープニングで劇をしてから始めます。春は誕生祭と言って、町内会代表の人たちの協力を得て、地域の祭りになっています。夏は夏祭りと言って、その都度サブタイトルを決めます。これは地域の商店街の人がバックアップしてくれています。冬は冬祭りと言って、その都度サブタイトルを決めます。これは近所の南郵便局が協力してくれています。普段でも郵便局にはばあんコーナーが設けられていて、消印にもばあんが使われています。これらは地域住民の理解と支援があって、初めて実現するものだと思います。

Q 子ども委員会のモチベーションはどうですか？

A(粕川) 最近はマンネリ化しています。オープンから 1 年間はいろいろ議題がありましたが、それが終わって、子ども委員会ではやるのがなくなっています。無理する必要はないと思っています。子どもがやりたいことを保証できる体制が大切だと思います。

この年 3 回のお祭りがあるので、1 年中文化祭をやっているようなものです。会議の時などでは、最初中学生は話を聞いていないように見えますが、そのうちに皆意見を言うようになります。自分の出番に気づいているのだと思います。小学生は祭りが好きです。ですから委員会にも集まってきます。約 60 人の委員の中で、毎回約 20 人が出席して会議を開いています。

Q 施設で何か問題は起きていますか？

A(粕川) 物が壊れたり、ゴミが出ます。これについてどうしたらいいのかの対策も委員会で考えます。

A(館長) 施設の利用についてですが、最初は 18 時で閉館の予定でした。しかし高校生などが利用しにくいということで、子ども委員会で検討したところ、21 時まで延長してほしいということになった。しかし職員の手当ができないので、子どもたちの自治でやってみたらどうかと投げかけました。委員会は OK したのですが、議会でもめました。やはり子どもたちが管理することは問題であるということになりました。普通はここから進まない

のですが、議会で職員をつけて、21時までを利用時間にするようにということになりました。人件費を出してまで子どもたちの言い分を通したわけです。

Q 子ども委員会に参加してきて、自分が変わったということがありますか？

A(佐藤) 人脈が広がって楽しくなりました。就職できたのもばあんのおかげだと思っています。就職試験の時にばあんでの活動について説明しました。それで採用されたと思っています。まだ採用1年目にもかかわらず親睦会の幹事をやっています。こういうこともばあんでやってきた活動が生きています。

A(草野) 人づきあいは好きでしたがそれがさらに高じてきました。ばあんに出入りし始めていろいろな活動して子どもたちと関わるようになって、進路について目標ができました。保育士になりたいと思うようになりました。

A(鈴木) 最初は楽器講座に参加して、ばあんに出入りするようになりました。そして1周年記念で草野君とフォークデュオをやりました。そして子ども委員会に参加して、自分が少しずつ変わってきたような気がします。自分がポジティブな人間になってきたと思います。

A(粕川) 彼らはお互いに、いろいろな可能性を引き出しあっていると思います。そうしてだんだん変わっていているのではないのでしょうか。



「ばあん」との出会い

子ども委員会委員長 草野 大輔

僕が「ばあん」の子ども委員会と出会ったのは6年前のことでした。あの当時は友達と怖いものなしに無邪気に笑いあっていました。そして今では、少し大人になった 18 歳。僕の友達のマモル君の髪もブロッコリーから坊主に変わるくらい長い時間を、こんなに続けることができたのは同じ子ども委員会の仲間やスタッフの人、そして、「ばあん」を支えている地域の方々のおかげだと思います。これから僕と子ども委員会の6年間の激動の物語を語ろうと思います。

まず初めに、子ども委員会の説明をしたいと思います。子ども委員会は「ばあん」の建設当時に発足し、小学4年生から 18 歳までの子どもたちが館(ばあん)の運営に主体的に関わっています。内容としては、館内の問題を解決したり、年3回のお祭りの準備をしたりしています。

僕は、マモル君と「ばあん」の楽器講座に参加し、子ども委員会の担当職員の粕川さんに出会いました。それは5月5日の誕生祭での演奏会。そう、そこで出会ったのでした。館内では子ども委員会や地域の方が工夫を凝らしたゲームや模擬店などで大盛況でした。僕は、今までに感じたことないくらいの衝撃を受けたと同時に、運命のようなものを感じました。演奏会は無事終わり、僕らが帰ろうとしたそのとき、「一緒に打ち上げに行こうよ」と誘われ、ついていくまま気がついたら、子ども委員会に入っていました。こうして、なんとなく入ったのでした。

毎月第1・3土曜日にある委員会の話し合いに出席していくうちに子ども委員会のおもしろさ、一人ひとり個性が輝いていることに感動し、気がつくとはまってしまいました。お祭りの準備をしたり、みんなで遊んだり、時には真面目に話し合ってみたり…あつという間の6年間でした。中には楽しいことだけではなく、辛いこともありました。それをみんなで乗り越えることができたから、今の子ども委員会があると思います。去年から、僕は子ども委員会の委員長として委員会をまとめてきました。今までは委員として委員会に携わってきたから、右も左もわからず、口をパクパクさせていました。そんな僕を副委員長をはじめ委員会のみんなや粕川さんは優しく支えてくれました。その姿に涙があふれ、一人で泣いた夜もありました。そんな支えもあり、無事に委員長を終えることができました。これからは一委員として子ども委員会を陰ながら支えていき、残りの子ども委員会生活を全うしていきたいと思っています。

「ばあん」には、他にも様々な活動があります。僕とマモル君と粕川さんで立ち上げた「欲張部」では月1回、出来たときの達成感を大事にしようと活動しています。特に印象に残ってるのは、夏休みに行った「315km チャリの旅」です。町田市の「ばあん」から新潟の柏崎まで自転車で走るという企画です。あの時、流した汗と涙と日本海で見た夕日を忘れることができません。

次に、子ども委員会の高校生の中で他の地域の子供たちに「ばあん」の存在を広めたいという声が高まり「のびっこ遊び隊」が結成されました。月1回市内の公園に行き、遊びを提供しています。やはり、僕たちが始めに楽しんで遊ばないと、子供たちも楽しく遊ぶことができません。そこで工夫を凝らし試行錯誤しながら一緒に遊びました。本当によかったと思います。

最近では、僕と「ばあん」の職員で結成した SCEB (super comic entertainment band)『くま大』が毎回イベントで大暴れしています。興味のある方は、是非見に来てください！！

僕の中で子ども委員会の存在はかけがえのないものになりました。そして、僕がこれから進んでいく道で役立てていきたいと思っています。これを書くにあたって協力してくださった皆さん、本当にありがとうございました。

分類	内容	子ども会議		町田市子どもセンターばあん 子ども委員会			
	活動主体	運営委員会(青少年)					
参画の段階	8	その理由	イベントでは企画も実施も子どもたちで行っているが、どうしても大人の力が必要な内容については依頼している。				
団体名	町田市 子どもセンターばあん	E-Mail	baan@io.ocn.ne.jp		URL http://www6.ocn.ne.jp/~baan/		
代表者名	館長 奥津林蔵		042-788-4181	スタッフ	担当者1名、館長		
実施時期	通年	参加人数	約90人(小60、 中高30)	対象	小学校4年生～18歳	年齢	
他団体・組織との連携				活動資金			
趣 旨	利用者である子どもたちが主体的に運営に参画するため						
実施することになったきっかけ	建設時の運営準備委員会で直接子どもの意見を聞いたことから						
事業(活動)内容	毎月第1,3,5土曜日15:00～17:00に、館内のルールづくりや苦情処理、年3回のイベントの企画・実施など、その他不定期で新聞の発行(近隣、小中高校に配付)						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	上記2について、すべて参画している。担当者は必要に応じて助言等するが、基本的にすべて子どもたちが中心になって進めている。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり			その他	
	町田市子どもセンターばあん	青少年と大人					
イベントの準備等はすべて子どもたちの方で行っているが、手が足りないところや、進めていく上での問題については必要に応じて助言はしている。進めていく上では基本的には口出ししていない。サポートに徹している。							

表の見方は P.55 参照



横浜市青少年交流センター青少年委員会



横浜市青少年交流センターは中高生をはじめとした青少年の文化・交流活動を支援し、青少年の自立促進や育成を図る拠点施設として、“ふりーふらっと野毛山”という愛称で、平成 14 年 12 月 1 日に開館しました。“ふりー (Free) ふらっと (Flat) ”には、「自由に過ごすことができ、同じ立場(平ら)で交流でき、ふらっと気軽に遊びに来ることができる」という意味が込められています。中高生を中心とした「居場所と仲間作りの拠点」として中高生の声を生かした施設運営を進めています。その一環で「青少年委員会」を設置し、活動しています。

【お話を伺った方】

横浜市青少年交流センター職員 七澤 淳子 さん

青少年委員会委員長 森 正 憲 さん

Q 「青少年委員会」開設のきっかけはなんですか？

A(七澤) 横浜市青少年交流センター(以下交流センター)開設時に「青少年の声を施設運営に活かすとともに青少年が主体的に活動することを支援していく」という視点がありました。ただし、その中核を担ってもらう青少年たちには、実際に交流センターを使ってもらい、自分の意志で参画してもらいたかったので、平成 14 年 12 月のオープン時には募集せず、事業に参加した青少年が増え始めてきた平成 15 年 9 月に中学生以上の青少年(24 歳まで)を対象に委員を公募して、10 月に発足しました。

Q 委員はどのようなメンバーが集まったのでしょうか？

A(七澤) 市内の中学校、高等学校にチラシを配付したほか、館内でも利用者に対し周知しました。また、交流センターの主催事業「夏期青年ボランティア活動」(81 人参加)や他のイベントの参加者にも声をかけまし

た。その結果、市内中学校へのチラシから 3 人、交流センター内のチラシで 5 人、夏期青年ボランティア参加者 11 人の計 19 人になりました。年齢は中学校 1 年生から 24 歳でした。

Q 他施設の子ども委員会などは小学生も対象になっていますか？

A(七澤) 実際は小学生の利用も大変多いです。しかし交流センターは中高生を主な対象とした事業をおこなっているため、委員も中学生以上を対象にしました。任期は 3 月までとしました。

Q 平成 16 年度の委員で継続しているものはありますか？

A(七澤) 平成 16 年 2 月に第 1 期の委員に継続の意思を確認しましたが、「自分の考えていた活動と違った」「部活や受験勉強が忙しい」という理由のほか、進学や就職など環境が変わるためやむを得ず継続しなかった委員もいます。3～4 月に前年度と同様に公募して、9 人の応募があり、そのうち 8 人が継続でした。

Q 委員会は月何回実施していて、どんなことをしているのでしょうか？

A(森) 月 1 回の定例会を実施しています。平成 15 年度は主催イベントとして、「若殿様からの挑戦状」を平成 16 年 2 月 29 日(日)に実施しました。この時はイベント部会を立ち上げてそこで、5 回打合せをして企画を練って、当日に臨みました。内容は「館内ウォークラリー宝探しゲーム」というもので、参加者は 29 人でした。スタッフは当日お手伝いしてくれたボランティア 3 人、委員が 10 人でした。その他に宿泊研修会の実施や、開館 1 周年を記念した事業を実施のため青少年のみで組織した「1 周年記念事業実行委員会」に 2 人、「愛称選定委員会」に 1 人を青少年委員会の中から選出しました。またセンター主催のイベントの運営スタッフとしても協力しています。

Q 主催事業のあとのふりかえりではどんな話が出ましたか？

A(森) 担当者から定例会でイベントについて説明をしたときに、内容が詰まっていなかったため他の委員が何を手伝っていいのかが分からず混乱させてしまいました。その後打合せを 5 回開き準備をすすめたのですが、当日手伝ってくれたボランティアへの説明がうまくいかなかったのが反省点として出ました。また、準備が遅れて広報できたのが 1ヶ月前だったので、交流センター内にポスターを貼ったに留まり、参加者が少なくなっていました。全体的に準備不足であったので、今後はもっと準備を早く始めたいと思います。

Q 平成 16 年度も主催イベントはやりましたか？それには平成 15 年度のふりかえりが生きていますか？

A(森) 平成 16 年度は主催イベントとして「子どもだー！浴衣だー！夏休みも終わりだー！」を実施しました。委員が 9 名と少ないこともあって、部会は設けず中心となって企画する担当者を決め、イベント前の宿泊研修でも企画を練りました。夏期ボランティア活動の参加者と子どもたちが夏休み最後の交流を図るため、ゲームやスポーツ大会を実施しました。参加者は小中学生 30 人、夏期ボランティア 40 人、委員 5 人でした。夏期ボランティアの人数に対して、子どもがまあまあ集まってバランスはよかったです。

ところが夏期ボランティアには当日スタッフとして、ローテーションを組んで活躍してほしかったのですが、その意図がうまく伝わっていなかったため、当日の運営がスムーズにいきませんでした。

Q 職員はこのような活動にはどのように関わっているのですか？

A(七澤) 助言をしています。また、学校などへの広報やボランティアの募集周知などをお手伝いしています。しかし準備や当日の運営にはほとんどノータッチです。聞かれたら答える、という程度ですね。失敗するのも勉

強と思っています。

委員とは何でも言い合える関係にあり個人的には色々な意見や話が出るのですが、定例会になるとなかなか意見が出てきませんね。

Q それはなぜでしょうか？

A(七澤) 自己主張をするタイプよりもやや依存心の強いタイプの委員が多いかな、という印象があります。あとは、定例会の雰囲気作りができていないんだと思います。どうも会議になると固くなってしまいます。実現可能な範囲の意見しか出てきません。実際に交流センターを利用して事業にも関わり、職員と話す機会も多いので、こちらの気持ちや様子が分かりすぎて、職員や交流センターに気を遣っているのではないかと思います。

例えばオープン時には子どもたちの利用に関して、ほとんどルールらしいものはありませんでした。あるきっかけで、大きくルールが変わったことがあったのですが、その件で委員にアンケートをとってみると、ルールを決めてそのルールを守らなければならないという意見が多かったです。

委員長は協調型のリーダーで委員からは信頼されています。

Q 最近の委員会の動きで目につくものはありますか？

A(森) いつでも使える打合せ場所がほしいという意見が出て、事務室の一角を確保し、専用のロッカーも使えるようになり、みんながそこに集まったりなど活動がだいぶ活発になりました。またインターネット上の掲示板を立ち上げて意見を言い合えるようにしています。少しずつ書き込みが増えています。

Q 委員をやっていて、変わったという子がいますか？

A(七澤) 最年少の委員がいるのですが、年長者に囲まれて緊張していたのか、意見を言うこともほとんどありませんでした。それがやっているうちにどんどん明るくなって意見も出るようになってきました。委員長たち年長の者が意見を言いやすくするため色々な工夫をしているようです。今年度も継続して活動し、自分から広報担当を買って出ました。

Q 今後委員会でやってみたいことはありますか？

A(森) 3月にイベントをやるのですが、それを成功させたい。交流センターを使いやすくして、利用者を増やしたいし、いろいろな人に知ってもらいたいと思います。

Q 今後委員会に望むことはありますか？

A(七澤) 手がかからないので、もっと困らせてほしいです(笑)。私とその雰囲気を作っているのかもしれませんが、こちらがしかけないと、まだまだ自分たちだけで動くのはできてないかな…。定例会の前に委員長、副委員長と打ち合わせをしているのですが、どんなことを話し合っただけで何がやりたいのかはなかなか出てきません。

昨年おもしろいエピソードがありました。開館時にあったテレビゲームが壊れたりして出していなかったのですが利用者から要望があるので、青少年委員会でどうしたいか考えてもらおうと伝えてみたところ、結局出さない方がいいという意見が多かったです(笑)。個人的には「出してもいいかな…」と思っていたんですけど。どうも大人が考えている方向、望んでいるだろうという方向に合わせてしまうのかもしれない。

委員会は社会参加の一つであると考えていますので、基本的な社会ルールなど学んでもらえたらと思っているので、遅刻や欠席の際の連絡などはうるさい程言っています。

委員との距離の取り方も難しいですね。仲が良すぎることで、かえって彼らの自由な発想力を狭めている気

もします。職員も試行錯誤しながら委員と一緒に成長していきたいと思います。

青少年委員会での体験

横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)

青少年委員会 委員長 森 正憲

桜木町駅からみなとみらい方面とは反対側へ向かい横浜市立中央図書館と野毛山動物園のちょうど中間に「ふりーふらっと野毛山」があります。この施設で青少年委員会の委員長を務めさせていただいている森です。まだできたばかりの青少年委員会でのこれまでの体験とこれからのことについて書いていこうと思います。

1、委員になったきっかけ

「ふりーふらっと野毛山」がオープンした翌年、全館を使ってセンター初のイベント「こどもの日まつり」が開催されました。僕も職員から声をかけられこのイベントにスタッフとして関わりました。準備や当日の進行など大変でしたが、終了後は何ともいえない充実感と達成感を味わったのを覚えています。

夏休みのセンターには多くの小中学生が遊びに来ます。彼らの遊びや勉強のサポートをする「お兄さん・お姉さん」としてセンターでは「夏期青年ボランティア(以下夏ボラ)」を募集しました。ただ「遊ぶ・勉強する」だけでなく、それを通して子どもたちもボランティアも多くの出会いを経験し、色々な価値観があることを知り社会を広げてほしい、という活動の趣旨を知り「こどもの日まつり」以来、もっと色々なことを経験してみたかったので応募しました。

夏ボラは高校生から社会人までの 81 名が 5 日間の日程で参加しました。短い期間でたくさんの出会いがあり、刺激を受けました。活動日以外にセンターへ行っても、子どもたちが声をかけてくれたり、一緒に遊ぼうと言われたり... そのような嬉しい出来事を経て、夏ボラをやってよかったと思うほか、何らかのかたちでセンターとの関わりを持っていきたいと思いました。

その思いはまもなく実現することになりました。この年の 10 月、青少年がセンターに主体的に関わる組織として中学生から 24 歳以下で構成する青少年委員会が発足しました。僕は、日々の思いやイベントの企画などを実現させてみたいと思い、応募しました。

そして、委員長という大役を担うことになりました(この後、2 期も委員長をやるとは思いませんでした)。大きな不安がありましたが、他の委員と協力してうまくできればいいなと思いました。

2、青少年委員会スタート！そして委員長になってから

委員会をまとめていくことになりましたが、全く初めての経験なのでどうしていいか分からずに戸惑いました。まさにゼロからのスタートです。

まず、考えたのはこの委員会をどんな方向に持っていくかということです。委員全員がどこに向かうべきか分からず漂流状態になってはいけないし、それぞれ思いややる気があってなってくれた委員の気持ちに添えていきたいと思いつつ、言葉でうまく伝えることができず、いつも揺れ動いている状態でした。

次に 19 人もいる委員がどうすれば活動しやすくなるかを考えました。そこで、5 ~ 6 人で構成する部会(小委員会)を作れば活動しやすくなるのではと考え、3 つの部会を作りました。イベント企画部会、広報部会、センター部会の 3 つです。

イベント企画部会、広報部会は比較的活動が分かりやすかったのですが、最後のセンター部会は、センター内での貸し出し物品の管理やどうすれば利用者にキレイに使ってもらえるかななどを考えてもらいたかったのですが、そのことがうまく伝わらず部会員がどんなことをすればいいのか迷ってしまい、結果として機能するにいたりませんでした。

定例会を重ねていくにつれて、ただ議題を進行していくのに精一杯であったのが、どうすれば話しやすい雰囲気を作れるか？もっと意見は活発に出ないのか？などのことも考えるようになりました。定例会では委員長が議事進行をしていますが、慣れてくると「議事を淡々と読み、確認を取って終了」になっていることに気が付きました。僕は、強力なリーダーシップで引っ張っていくタイプではなく、全員と協調してやっていくタイプの委員長だと思います。そこで、議題がすんなり決まると「本当にいいのかな？」と疑問に思うことがあるのです。しかし、担当職員と一緒に考えたり、自分で会議の進め方を勉強したりしていくうちに、だんだんと意見が飛び交うようになってきました。そんな時、委員会主催イベントを行うことが決まりました。参加者は少なかったのですが、その分一人ひとりとコミュニケーションが取れ、とても楽しくできました。ただ当日お手伝いに来ていただいたボランティアさんに「どんな目的でこのイベントを行っていて、こんなことを考えながら活動してほしい」という説明が不足したので、戸惑わせてしまう場面が多くあり、人に説明し、動いてもらうことの難しさと大切さを痛感しました。

このイベントや、3月に行った宿泊研修で討議しあったり、レクリエーションやバーベキューをする中で、委員の結束が高まっていったのを感じました。また、経験をすることで委員たちが委員会活動に対し、もっと意欲的に、そして親しみをもてるようになったのではないかと思います。

第1期は半年という短い期間ということもありあっという間に終了してしまいました。反省として、青少年委員会は何をしていきたいのかということを確認に出来なかったこと、それに対し一人ひとりがどんな意見を持っていたのかを確認できなかったこと、そしてみんなの意見をどう聞いていくのかという会議のあり方が挙げられます。ただ、活動の後半に行ったイベントや研修を通じて委員会の盛り上がりを感じたので、第2期に期待を感じることもできました。

3、第2期始動。そして今...

第2期も僕は継続して委員を続けることになりました。メンバーは9名に減り1名の新規委員の他は全員が15年度からの継続です。第1期の反省などを活かしてうまく進めばと思っていました。

委員長も継続して僕が行うことになりました。そして初めに、「少人数の中でどうすればより良い活動ができるのか」をみんなで話し合い、部会を廃止し各事業の中心となる担当者を決め、全員で進めていくことになりました。副委員長を2名に増やしてもらい、より意思疎通をしやすくなりました。

1回目の定例会で、委員長としてこの委員会をどのようにしていきたいのかを話し、広報紙の発行、イベントの開催、そして利用者にとってセンターをもっと居心地の良い場所にするために何ができるのか、の3点を主軸に活動をしていくことを、委員の理解を得て決定しました。

そして、活動が始まってすぐの夏休みの終わりに、第2期初めての主催イベントとして「子どもだー！浴衣だー！夏休みも終わりだー！」を開催しました。これは、夏ボラと子どもたちとの交流の場をつくり、夏休み最後の思い出づくりをお手伝いしよう、という目的で企画したものです。

「どうしたらみんなが楽しめるだろう？」と時間配分や役割などを考え準備をしました。当日は、子ども30人、夏ボラ40人の参加者があり、ほぼ全員が「楽しかった」と言ってくれたので、僕たち委員も「がんばってきて良かった」と心から思いました。終了後は、ボランティア同士の交流会も企画し、同じ目的を持つさまざまな年齢や経験をした人たちの出会いの場をつくることができました。しかし、昨年度のイベントの課題でもあった当日

参加のボランティアへの説明不足があり、あらためて『他の人に説明する』ことの難しさを実感しました。このことは、委員会全体の課題として捉えていきたいです。

また、この交流会で委員会のPRをし、10月からは1人、新たな仲間が増えました。

夏休みが終わった後は広報紙発行に向けて全力を注ぎました。少人数なため、一人ひとりの負担が大きかったのですが、みんなで協力し合い、何とか無事に10月に第1号「君にふらっと」を発行することが出来ました。「発行することに意義がある」を合言葉に、編集担当者を中心に全員が記事を書きました。発行後「ここをこうすればよかった」という声が次々と聞こえ、委員長としてこんな向上心あふれる委員会をまとめているのかと実感し、とても嬉しくなりました。第1号約200部はおかげさまであっと言う間に配布予定枚数を終了しました。

第2号は、第1号での反省を活かし、もっと魅力のある広報紙を間もなく発行する予定です。

4、今後の課題

青少年委員会の課題は次から次へとできて、山のようにあります(笑)。

まず、委員会がどのようにセンターと関わりセンターに対してどのように意見を提示していき、利用者に伝えていくか、ということがあります。個人ではいい意見を持っているのに定例会では自分の意見を言えない人もいるようなので、誰もが自由に意見を交換しあうことができる雰囲気づくりが目標です。色々な視野を持つ意見がたくさんでて活発になっていくことは、委員会だけではなく、センター・利用者のためにもなっていくと信じ、委員長として日々努力しています。

次に人数不足があげられます。16年度の10人では一人ひとりの負担が大きくなっているのが事実です。「青少年委員はこんなことをしていて、こんなに大切な経験ができますよ」と周知していき「自分もやってみたい」と思ってもらえるような仕組みづくりが必要だと感じています。

まだ発足して1年。今後しばらくは模索していき、不安定な状況が続くかもしれません。「失敗も勉強だ」と言いつつも暖かく見守ってくれる職員さんたちに感謝し、これからの青少年委員会がどう活躍できるか日々勉強していきたいと思っています。



分類	内容		子ども会議			
	活動主体		運営委員会(青少年)			
横浜市青少年交流センター青少年委員会						
参画の段階	6		その理由	まだまだ委員自身で課題を見つけしていく力が十分とはいえない。しかし一部の事業では主体的に取り組み、大人はそれらについて随時「報告を受ける」形になっているので、6とした。		
団体名	横浜市青少年交流センター青少年委員会		E-Mail	yva-0673@triton.ocn.ne.jp	URL http:// なし	
代表者名	委員長 森 正憲		045-241-0673	スタッフ	担当スタッフ3人(職員1人、コーディネーター2人)	
実施時期	定例会月1回、担当者会議随時	参加人数	参加人数 9人(社会人4人、大学・専門学校3人、高校生1人、中学生1人)	対象	市内在住・在学・在勤の中学生～24歳までの青少年	年齢 中学生～24歳
他団体・組織との連携		特になし		活動資金	交流センター運営費から支出	
趣 旨	横浜市青少年交流センターが青少年にとって利用のしやすい場所になるため、利用者の代表として運営に参加する。					
実施することになったきっかけ	横浜市青少年交流センターの開館に伴い発足。					
事業(活動)内容	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者のニーズを把握した主催イベントの企画、運営 ・交流センターの様子や青少年のニーズを探る広報紙「君にふらっと」の発行 ・センター主催事業の運営補助 ・センター主催の青年ボランティア研修の運営補助 					
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての委員が公募により集まっている。委員長、副委員長(2人)が定例会前に担当スタッフと事前打合せし、議題の選定や当日の司会進行を行っている。また、イベントや広報担当は、随時担当者会議を開催し、企画から実施まで行う。担当スタッフは適宜助言を行っている。 					
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他	
	横浜市青少年交流センター		大人			
<ul style="list-style-type: none"> ・発足してから1年と期間が浅いため、委員会の運営基盤が確立されてなく、自分たちが何をすべきなのか、何をしたいのかを見出すことが難しいようだったので、担当職員が課題を与え、委員長・副委員長を中心に、委員がそれらについて考え、実行していく、という方法を取っていた。しかし、徐々に自分たちのやっていきたいこと(広報紙の発行や主催イベントの実施など)が明確になり、それらに対して、自分たちで企画し、相談し、実行していき、そのことが自信となっていっている。現在は、必要な時に助言を行う程度になってきている。また学生が多いので、会議等の交通費は負担している。 						

表の見方は P.55 参照



チャレンジショップ Gestoreおだわら



“チャレンジショップ Gestoreおだわら”は、小田原銀座商店街の空き店舗を有効活用して、県立小田原城東高等学校の生徒たちが授業の一環として店舗経営に取り組んでいるものです。Gestore（ジェSTORE）はイタリア語で経営者という意味があります。地元商店会や自治会青年部などと協力し、イベントに参加することで、商店街の活性化にも貢献しています。

【お話を伺った方】

小田原城東高等学校教諭 廣幡 清広さん

黒石 陽子さん(3年生)、木村 那々子さん(3年生)

Q 出店の経緯を教えてください。

A(廣幡) 農業高校、工業高校、水産高校など専門高校は机上で学んだことを実習する施設を持っていますが、商業高校は常に実習する施設というものがなかったというのが出店しようと思ったきっかけです。これは生徒ではなく教員としての発想です。文部科学省が推奨する「みんなの専門高校プロジェクト」の2年目の事業として行いました。また単独で店舗を開店させるより、地元の専門高校生で一つの店舗経営を行ったほうがメリットがあると思ったので、小田原城東高等学校、吉田島農林高等学校、小田原城北高等学校の3校の協働で、平成16年4月29日に開店しました。

Q 学校での位置づけはどうなっているのでしょうか？

A(廣幡) 専門高校生徒の実践的活動を通じて授業で学習し習得した専門的知識・技術等の定着を図ろうとしています。また商業人として、起業家精神(アントレプレナー)を育成することを目標としています。

Q どういう組織で取り組んでいるのでしょうか？

A(廣幡) 火曜日から金曜日までは「課題研究」の生徒が 15 時から 18 時まで担当しています。生徒側の組織としては、「課題研究」を選択している生徒が、商業科・国際経済科 13 人、情報処理科 8 人です。土曜、月曜、祝日は「店舗経営同好会」の生徒が午前、午後のシフトで担当しています。「店舗経営同好会」は 1 年生 4 人、2 年生 4 人、3 年生 26 人計 34 人です。

大人の側の組織としては、3 校ジョイント事業推進協議会(小田原城東高等学校、吉田島農林高等学校、小田原城北高等学校、自治会、商店会、小田原市、神奈川県)、3 校ジョイント事業実行委員会(3 校の担当者)、城東高校の校内組織としては「みんなの専門高校プロジェクト」のメンバー + 賛同者(10 人)がいます。

Q 販売品目とその仕入れルートはどうなっていますか？

A(廣幡) 販売品目は、魚の缶詰、瓶詰めのジャム、缶ジュースなどの食品類が多いのですが、小物類や花などもあります。全国の専門高等学校を中心に、職員と生徒とでインターネット等を利用して選定し仕入れています。生徒が開拓し教員が連絡して、生徒が相手校と商談するという方法をとっていますが、教員主導から生徒主導へ移行しつつあります。委託商品(施設などから物品の委託を受け販売している商品)は地元らしい産品を中心に選定しています。また商店会の方からの委託先を紹介していただいているケースもあります。

Q 地域との関わりはありますか？

A(廣幡) 小田原市主催のイベントや商店会主催のイベントに積極的に参加しています。例えば地元の銀座自治会青年部の方々と一緒に夏祭り(銀座ゆかた祭り)を企画し実行したり、「Gestore おだわら」の単独イベントで防災意識を高める目的で普通救命講習会を実施しました。それから銀座商店会の街頭放送などを作成しています。

Q 商店会のサポート体制はあるのでしょうか？

A(廣幡) オープン時に商店会が金券を発行して後押しをして頂きました。普段の時も、お店の前を通るときに生徒に声を掛けて頂いたり、ディスプレイのアドバイスなどをしてもらっています。近くの新聞販売所で新聞折り込み広告を無料で入れていただいています。

Q 地元やマスコミ等の反響はどうでしょうか？

A(廣幡) 地元の評判は良いと聞いています。神奈川では初めての試みで、7 月 28 日には知事も視察に来られました。NHK、テレビ神奈川、小田原 CATV、フジテレビ(取材継続中)で放映され、日経新聞、日経流通、読売、朝日、毎日、日本農業新聞、神奈川新聞、地元タウンニュース、地元ポスト広告などに掲載され、NHK、FM 横浜、山陽ラジオ放送で放送され、報道されました。

Q 活動資金はどうなっているのですか？

A(廣幡) 資本金(小田原市 100 万円、起業戦略プランコンテスト 10 万円、PTA 30 万円)の 140 万円でスタートしました。今年度上半期の利益は 33 万円で、家賃が 50 万円ありますので、純益は赤字ですが、市からの補助金を家賃に充てていますので、何とかやっていけます。

Q 生徒との関わりで苦労した点がありますか？

A(廣幡) 始める前は生徒の間では盛り上がりませんでした。どうせ働くならアルバイトの方がいいという意見

が多かったです。それをやる気にさせるのが大変でした。しかし始めてみますと、アルバイトはやらされるだけですが、このお店では自分たちで考え、商品を仕入れ販売することによって、利益を上げることができますので、楽しいと思うようになっていきました。

Q 中には馴染まない生徒もいるのではありませんか？

A(廣幡) 確かに接客が苦手な生徒がいました。しかしそういう生徒でも会計はおもしろいと思ったり、絵を描くことが好きなので、それを商品作りに生かしています。また逆に人と接するのがどうかと思っていた生徒が、お店で接客してみてもおもしろいと感じた場合もあります。体験的に学べますので、自分がどういう分野に向いているかを考えることができるようになり、進路選択にも役に立ちます。

Q 生徒の変化はありますか？

A(廣幡) 接客したり、商店街の人に接することで、社会のルールを学んだようです。例えば商店街の人に接客するときの態度やシャツを出した着こなしや髪型などについて注意され、変わっていきました。また暇になると店内で携帯メールを始めたりしていたのが、自分たちでルール作りをして人前ではしないようにするようになりました。また暇な人間がいないようにお店に出る適正な人数を考え、4人から2人にしました。営業日誌をつけ、翌日のシフトの生徒に引き継ぎをして、営業に支障のないように工夫しています。このように最初は文化祭の延長のような感じでしたが、自分たちのお店だという意識が出てきたようです。

Q お店をやってみようと思ったきっかけは？

A(黒石陽子、情報処理科3年生、店長) 情報処理科ではプログラミングなどを勉強していますが、「流通経済」という授業を受けて、おもしろいと感じました。そこで課題研究という授業で「店舗経営」を選択しました。

Q 実際にやってみてどうでしたか？

A(黒石) 接客がおもしろいと感じました。それから意見を出し合って商品開発や仕入れ企画書を考えたりするのが、皆でひとつのことをするという意味で充実していて楽しいです。

Q お客さんは何か言ってくれますか？

A(黒石) お客は、18歳から64歳までの女性をターゲットにしていますが、若い人はなかなか来てくれません。しかし近所の年配の方たちが、いろいろアドバイスをしてくれます。商品のディスプレイの仕方や服装についてなどです。また「この商品はおいしいのよ」と言ってくれる人もいます。

Q 生徒たちで広報を工夫していますか？

A(黒石) 広告を自分たちで作って、読売新聞の折り込みに入れてもらっています。また街頭でビラ配りをしています。

Q 銀座ゆかた祭りでは具体的にはどんなことをしたのですか？

A(黒石) 地元の銀座自治会青年部の人に何かやってみないかと持ちかけられました。そこで企画会議に参加し、生徒の意見としていろいろ企画を出しました。そして看板作り、ビラ配りもしました。生徒と青年部の人たちとで仕切って、銀行の駐車場を借りてステージを作り、吹奏楽やバンドのコンサートを開き、大変盛況でした。また模擬店を開き、浴衣で来店者を出迎えました。浴衣で来店すると割引したり、粗品がもらえる特典など

も考えました。夜には浴衣で来場した人を対象に、帯の結び方や絵柄などのファッションをチェックする「ゆかた de ナイト」も行って、評判がよかったです。

Q お店をやっていて、生徒間でぶつかることはありませんか？

A(黒石) 最初のうちはディスプレイの方法などで意見が対立しましたが、最近はあまりありません。その日のシフトの2人で開店前に相談して、ディスプレイなどを考えています。自分としてはそういうことも含めて、「やらされている」というよりも「やっている」という意識の方が強いです。積極的な攻めの姿勢です。

Q やってみて、自分に変化はありましたか？

A(黒石) 以前は人前で仕切ることができませんでしたが、仕切れるようになりました。人見知りでなくなり、大人と普通に話せるようになりました。度胸もつきました。お店でいやなことはあまりありませんが、あってもすぐに忘れられるようになりました。

Q 始めたきっかけは何ですか？

A(木村那々子、情報処理科3年生) 何も知らないことなので、好奇心があって始めました。やっていくうちに自分の至らない点が見えてきました。店長が頑張っていますので、刺激されてやる気が出てきました。

Q お客さんと接してみようですか？

A(木村) 今まで親か先生しか接していなかったのが、いろいろ接することができるようになりました。その中で今までどおり普通に話をしても自分の言葉が通じないことに気づきました。また仕事をするということは、広い視野で物事を考えなくてはいけないということや、先を読まなければならないということも理解できました。

Q 落ち込むことはありますか？

A(木村) 意地悪な人もいますが、こういう人も世間にいるんだなと思うようにしています。お店をやっているので腹を立てても仕方ないと思うようにしています。未来は自分で明るくするものだと思いますので、あまり落ち込むことはありません。



Q 先生とぶつかることはありますか？

A(木村) 「やらされている」と感じることはありますが、自分で選んだことなので基本的には「やっている」と思っています。現在は先生が主に仕入れをしていますが、生徒に任せてほしいと思っています。

Q 先生がいてよかったと思うことはどんなことですか？

A(木村) 値段を考えるとかなどの困ったとき、判断に迷ったときなどに先生のアドバイスが有効ですので、いてくれると助かります。またお店のことだけでなくいろいろ悩みを相談できます。

Q やってみて、自分に変化はありましたか？

A(木村) 先生を見る目が変わりました。それまでは先生は先生であって、勉強をしてくれる存在でしかありませんでした。一緒にお店をやりながら先生も普通の人間なんだと思うようになりました。人は1人では生きていけないこともわかりました。例えば商店街の人が協力してくれてはじめてお店が成り立つことが具体的な体験を通してわかりました。自分の中ではやってみてよかったかどうかは、まだわかりませんが、卒業するときには評価が出ると思います。

表の見方は P.55 参照

分類	内容		店舗経営		チャレンジショップ Gestoreおだわら			
	活動主体		高校生					
参画の段階	6		その理由	教員が企画し、授業の一環で始めたが、徐々に生徒たちが店舗経営に参画するようになり、アイデアも自分たちで出すようになり、教員と相談しながら進められるようになってきたから				
団体名	小田原城東高等学校		E-Mail	なし	URL			
代表者名			0465-34-2847 小田原城東 高等学校	スタッフ	教員、生徒			
実施時期	月曜日以外	参加人数	34人	対象	一般	年齢	18～64歳	
他団体・組織との連携	県、小田原市等		活動資金	小田原市の補助金100万円、コンテスト賞金10万円、PTA30万円				
趣旨	専門高校生生の実践的活動を通じて授業で学習し習得した専門的知識・技術等の定着を図ろうとしている。また商業人として、起業家精神(アントレプレナー)を育成することを目標としている。							
実施することになったきっかけ	農業高校、工業高校、水産高校など専門高校は机上で学んだことを実習する施設を持っているが、商業高校は常に実習する施設というものがなかったというのが出店しようと思ったきっかけである。							
事業(活動)内容	店舗経営及び地域活動への参加							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	商品選択、仕入れ、販売、広報等の店舗経営への参画及び地域活動の企画・実施							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり			その他		
	小田原城東高等学校	青少年と大人						
始める前は生徒の間では盛り上がらなかった。どうせ働くならアルバイトの方がいいという意見が多かった。それをやる気にさせるのが大変だった。しかし始めてみると、アルバイトはやらされるだけであるが、このお店では自分たちで考え、商品を仕入れ販売することによって、利益を上げることができるので、楽しいと思うようになっていった。								